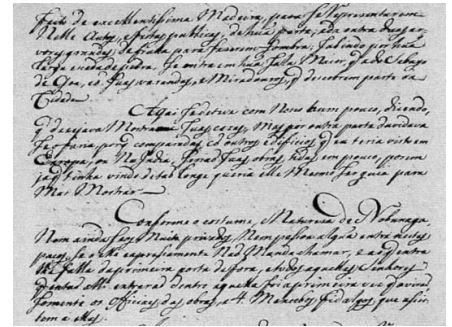


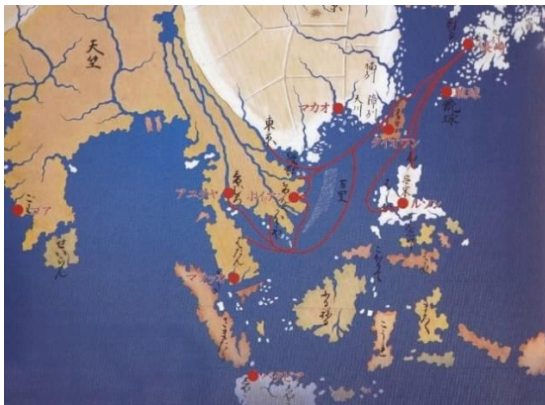
『南蛮資料から見る堺と天下人』～南蛮資料の歴史価値～

観光ガイドをしていると、「それは歴史的事実ですか？」と問い詰められることがありますね。でも「歴史的事実」とはなんぞや？ということを考えてみると、その基になるのは、考古学の物的資料はべつにして、全て文字として残る文献資料になります。なかんずく、同時代の当事者によって書かれた文書が、文献歴史学では一次資料として最も尊重されるのですが、この点では何千年前の文献が今も残るギリシャ・ローマに代表される西欧の文献資料は膨大なもので、アジアで対抗できるのは中国だけでしょう。歴史的文獻を残すためには、記録する努力だけではなく、記録を消失・焼失のリスクから守るため写本し、それを保管・維持する努力が継続的に成されなければなりません。

日本ではというと、ご承知の通り8世紀に編纂された『記・紀』が最古の文献資料で、もちろん一次資料ではありません。日本人の文書管理に対する感覚は、昨今の政府における文書管理のずさんさを見ればお分かりの通り、民族的DNAかとも思ってしまいます。しかし、日本人とは比較にならない文書管理のDNAを持つ西欧人が、戦国時代に地の果てともいふべき日本にキリスト教布教という使命感を持って来日し、約60年に渡って組織的に日本の情報を収集し、記録した膨大な文書群が現代



フロイスの日本史



に至るまで維持管理されているということはお存じでしょうか。ザビエル以来、数百人というキリスト教宣教師が在日しましたが、彼らは宣教地での情報を収集し報告書を提出することが義務付けられ、各地からの報告書は、日本の布教本部（豊後）に届くと、年報という形でまとめられたり、通史としても編纂されました。これらの文書は日本から出状する時、少なくとも3通はコピーされ、安全確保のため別便でアジアの布教本部があるインドのゴアに集められ、そこでラテン語やポルトガル語、スペイン語とい

うマルチ言語で写本され、インドからローマの本部に分散送付するためにさらに複数コピーするという我々には途方もない労力が費やされました。この複数の写本群が、世界各地で今も保管され、ローマにあるイエズス会文書館ではその膨大な文書群をマイクロフィルム化して、アフリカや南米にまで分散保管しているということです。大地震、核戦争によりローマが壊滅したとしても歴史文書は残すいうすさまじい執念ですね。全世界に残る文書記録の中で日本関係の文書だけでも膨大な量となり、フロイスの『日本史』、ロドリゲスの『日本教会史』のような通史や、書簡集、年報などのように刊行され、日本語訳されたものの他未整理、非公開のものもまだ多数あるとのこと。非公開の書状などに、どんな歴史的事実が隠されているのか、などと想像するだけで興奮しますね。

これらの南蛮資料には、宣教師たちが信長・秀吉・家康という天下人と直に会話し、彼らが家来には見せない生の姿や、元和の大火で焼失してしまった堺の姿などが記録されています。南蛮資料と総称される外国人宣教師達の記録から、黄金の日々の堺、天下人の生の姿を見ることは、非常に興味深く、次回以降徐々にご紹介させていただきますので、ご期待ください。

参考文献・参考資料 『南蛮資料の発見』 松田毅一 中公新書

『南蛮屏風』 17世紀初め紙本金地着色六曲一双 各 161.7×376.9cm

『南蛮資料から見る堺と天下人』～イエズス会宣教師の活躍・三好時代！～

南蛮資料の主役は、大航海時代に西欧から見て地の果てであった「新世界」を目指して、風と潮という当てにならない自然の動力しか持たない帆船で、何万里の過酷な航海の末、未知の異国にたどり着き、そこで生涯を終えた男たち、宣教師です。

イエズス会という最も新しい修道士会は、十字軍の失敗、プロテスタントというライバルに圧されるローマンカトリック教会にとって失地回復の「新世界」アジアへの布教開拓の先鋒を務める若い集団でした。



イエズス会紋章

皆さんご承知のザビエルは、イエズス会創立メンバーで、初代総長ロヨラの朋友でもある会の重鎮ですが、ポルトガル王国がアジア進出の要としたインドのゴアに派遣され、アジアでの布教を任せられます。彼がゴアに着いたのは 1543 年 5 月で、奇しくも種子島にポルトガル人が鉄砲を携えて漂着し、ポルトガル人が日本という国を初めて知った年でした。地の果てアジアで 4 年間必死の苦労を重ねましたが、布教は思うに任せず、行き詰ったザビエルの前に現れたのが、日本からの脱国者アンジローでした。日本人の資質がインドやマラッカの人種と全く異なることに驚いた彼は、1548 年 1 月 22 日付ロヨラ総長宛書簡で「インドでの布教は難しく、日本に行くしかない」と書き送っており、追い詰められた末の判断であったことが分かります。ザビエルは期待に胸はずませて日本に着き、島津氏など交易を求める大名達に受け入れられ、在日三か月後の 1549 年 11 月 5 日付マラッカ長官宛の有名な「日本中の金と銀が集まるまち堺」の報告をします。「堺にポルトガル商館を置き、自分に託せば莫大な利益を上げることができる」とポルトガル商船の誘致に必死な姿から、キリスト教布教のためにはポルトガルと日本との交易が必須であったことが伺えます。

西欧人と初めて接する伝統的文明国である日本人が、人間とも思えなかった「南蛮人」の異質の宗教集団を容易に受け入れたのは、日本人特有の好奇心の高さ（知識欲）と、交易という現実的な欲求があったからで、特に西国の大名達にとっては外国との交易は大きな魅力で、ポルトガル人たちの来航は歓迎すべきことでした。

ザビエルは、翌年待望のポルトガル船が入港する平戸に拠点を移し、勇躍日本の国王から布教の許可を得るため都に向かいます。しかし時あたかも三好長慶が将軍義春・義輝父子と細川晴元等、亡き父元長の仇敵を都から追い畿内の実権を握った頃で、都には「公方（将軍）」も不在、「内裏（御所）」は塀も破れたままの荒廃したありさまでした。ザビエルは失意のまま都を去りますが、当時「西の京」と云われた大内義隆の支配する山口と、北九州一体の守護である大友義鎮（宗麟）の支配地 豊後に布教の拠点を置くよう、一緒に来日したトルレスに後を託し、自らは 2 年余りの短い滞在で日本を去ります。ゴアに戻った翌年（1552 年）には中国（明）への布教を目指しますが、明に入国することすらできずマカオの南海上の上川（サンシャン）島で病を得て 56 年の生涯を閉じました。彼が日本から中国に目標を切り変えたのは、戦乱の巷である日本と比べて鎖国状態ではあるが平和で安定した大帝国であること、日本人が仏教を受け入れたのは中国からであり、キリスト教を日本に広めるにはまず中国からと思ったからでした。（ロヨラ総長宛 1552 年 1 月 29 日付書簡「シナ人がデウスの教を奉じたるを聞かば、日本人は諸宗派の膠見を速やかに棄つべし」）後継者トルレスは日本の布教長として山口、豊後に布教の拠点を築こうとしますが、大内氏の滅亡で山口を追われ、残る豊後を中心とする九州で信徒の拡大を図りました。イエズス会の布教戦略はトップ



ダウンで、国々の領主をキリシタンにするか少なくともシンパとすることにより、支配者に対し従順な日本人領民がキリシタンを受け入れ易い環境をつくることでした。

トルレスは友友宗麟の庇護のもと北九州に信徒を拡大し、豊後はイエズス会の布教本部となります。(利晶の杜のテイセラの日本図の九州の部分が大きく BVNGO と記されているのはそのためです)

1558 年、幕府を都から追い畿内を制覇していた天下人三好長慶が、将軍義輝を都に戻し幕府が復活すると、いよいよイエズス会の畿内進出が始まります。(続く)

参考文献 『ザビエルの同伴者アンジロー』 岸野 久 著 吉川弘文館

『フロイス日本史五畿内編Ⅰ・Ⅱ』 松田毅一/川崎桃太 訳 中央公論社

2020 年 11 月号(282 号)

『南蛮資料から見る堺と天下人』～イエズス会宣教師の活躍・三好時代 2～

トルレスは都のある日本の中心部、畿内への進出を図る為、布教強化の目的で日本に派遣されて来た司祭ヴィレラを起用します。1559 年ヴィレラは、山口で改宗した日本人修道士のロレンソ了斎と共に豊後を発ち、ザビエルと同じく堺から都を目指します。都に戻った公方様から日本布教のお墨付きを得て、都に布教の拠点を築くことが彼等のミッションでした。ヴィレラは、堺の商人日比屋了珪という協力者を得て、永源という仏僧や幕府執事伊勢貞孝の斡旋により将軍足利義輝と何度も会い、義輝とその家族からも歓待され、念願の伴天連保護の允許状を得ることに成功します。この時、堺を見たヴィレラの 1561 年 8 月 17 日付書簡が堺を世界に知らしめました。「堺の町は甚だ広大にして大なる商人多数あり。この町はベニス市の如く執政官によりて治められる」

三好長慶にも会って好意的な対応(フロイスは允許を得たと記録する)を得ていましたが、当時都の実質的な支配者であった霜台殿(松永久秀)は法華宗の信徒で、仏教徒のキリシタン迫害を支援しました。ヴィレラは、多聞山城の松永久秀に対し嘆願工作を進めますが、この時に久秀の家臣でやはりアンチキリシタンであった結城忠正を改宗させたのが、畿内布教の大きな転機となります。幕臣でもあり文武に優れた忠正は、自信満々で伴天連との宗論に臨みましたが、完全に打ち負かされ、改宗して畿内初のキリシタン武将となります。フロイスは、忠正の回心の状況を次のように劇的に表現しています。「彼は、手で畳を打ち、まるで深い眠りから覚めたかのように額をさすり、賛嘆の言葉を発してやまなかった」。

ヴィレラによりアンリケという洗礼名を授かった忠正は、大和、河内の三好家臣への布教を援け、河内の三好臣下の 73 名の武将が一挙に受洗するなど、日本布教史上かつてない大成功をもたらしました。高山右近の父飛騨守(ダリオ)や三ヶ領主の三ヶ頼照(サンチョ)など、敬虔なキリシタン大名達が受洗したのはこの時です。

フロイスは『日本史』で、この大改宗のあった 1564 年 6 月に飯盛山城で長慶から「キリシタン宗門のことは、すべてが予には非常に良いものと思われる。予はできる限り、教会とキリシタン宗団を擁護しよう」とのお墨付きを得たと記録しています。しかし、長慶はこの年 5 月に三好四兄弟の最後に残った実弟安宅冬康を飯盛山城で誅殺してしまい、その後悔のうちに 7 月に病死(死は秘匿)しておりこの記録は疑わしいですが、先の都での長慶のキリシタンへの友好的な対応もあり、三好家臣には改宗のプレッシャーはなかったのでしょう。

注目すべきは、畿内のキリシタン大名は、九州の大名と違い海外交易のメリットとは無縁の大名達であることです。実利ではなく、キリシタンの教えに純粋に傾倒し改宗した大名が増えたのは、優秀な説教者がいたことに他ならず、それは日本語を満足に話せないヴィレラではなく、偏にロレンソと

いう素晴らしい日本人修道士の存在があったからです。元琵琶法師でほぼ盲目に近く、足を引きずり、子供が怖がって逃げ出すような容貌であったというロレンソは、単なる通訳ではなく、キリスト教の教理を理解し、仏教に関する知識も並の僧ではかなわないほど豊富で、相手の土俵である仏教問答でも敵の矛盾を突く洞察力を持ち、聞き手を納得させるプレゼンテーション能力により、宗論において負けることを知らなかったということです。

公方様の庇護の下畿内での布教が大きく前進し、前途洋々と思われましたが、三好長慶の死により時代は大きく動きます。長慶により都に戻された足利義輝は三好の傀儡將軍になることをよしとせず、足利幕府の權威を復活するために各地の大名に上京を促し、上杉謙信や織田信長がそれに応えます。

長慶の死、義輝による幕府復権の動きに脅威を感じた長慶の後継者三好義継 松永久秀は、1565年6月將軍暗殺という暴挙に出ます。キリシタンを擁護していた將軍が亡くなるや否や、反撃に出た仏教勢力は朝廷を動かし、8月に伴天連追放の勅令が出され、ヴィレラと畿内布教強化のため都に派遣されていたフロイスたちは都から追われ、堺の日比屋邸に逼塞をさせられます。翌年、日本布教長のトルレス老病のため、ヴィレラは豊後に戻り、新米の若きフロイスに逆境の畿内布教が託されます。「傲慢不遜で神の恩寵に価しない」とフロイスが酷評する商人のまち堺で孤軍奮闘する彼の前にまさに救世主のように現れたのが、稀代の英雄織田信長でした。(続く)

参考文献

『ザビエルの同伴者アンジロー』岸野 久 著 吉川弘文館

『フロイス日本史五畿内編Ⅰ・Ⅱ』松田毅一 川崎桃太 訳 中央公論社

2021年1月号(284号)

『南蛮資料から見る堺と天下人』～イエズス会宣教師の活躍・信長時代Ⅰ～

織田信長は、日本史上に傑出した英雄ですが、我々が知っている信長の人物像は南蛮資料に負うところ大なるものがあります。それは日本人には見せない裸の信長を宣教師たちが直に見ていたことによります。信長が上京を果たし、天下取りとして知られるようになってから本能寺で横死するまでの14年間で、宣教師たちとの会談は実に31回に及び、それも2.3時間に及ぶものが多く見受けられます。部下との対話では冗長さを嫌い、用件を要領よく済ませないと気に入らず、返事も「そうであるか」としか返さない気短かで、本音を見せない「憂鬱な顔」とは全く違った顔を宣教師には見せていました。

足利義昭を奉じて上京を果たし、三好一族を四国に追い払って、天下人として都で公務に追われていた1569年3月末、キリシタンシンパの和田惟正の斡旋により、フロイスは信長との最初の会見に臨みます。しかしその場では信長は一言も発せず、和田、佐久間に相伴させ、贈物の中からビロードの帽子を受け取るだけで終わりました。関心がなかったのではなく、初めて見る南蛮人をじっくり観察していたのです。翌月、新公方の居城二条城の建設現場での2回目の会見では、公衆の見守る中で2時間にも及ぶ打ち解けた問答をフロイス、ロレンソと直接かわします。改革者の信長にとって、中国、天竺(インド)を超えた途方もない世界の大きさや、陰陽師の神秘的な宇宙観とは異なる合理的な天文地理の知識を持ち、信仰を広める目的だけで命を懸けて大洋を渡ってきた宣教師たちの真摯な態度に驚き、感心しました。同じ宗教人でありながら、既得権益に居座り世俗化し、権益擁護のために武装勢力化している仏教勢力と比べ、異国の



重要文化財 織田信長像

宣教師は文字通り全く違った人種に思えたことでしょう。宣教師達にとっても、迫害者である仏教勢力を侮蔑、敵視する権力者信長はまさに神の遣わした守護神でした。信長のキリシタンに対する好意は、フロイスの記録に幾つか残る細やかな心遣いから伺えます。



キリシタン聖堂を模した安土城考古博物館

工事現場のきつい日差しの中で帽子をとって拝謁するフロイスに、「陽が当たるから帽子を被るように」と気遣ったり、岐阜城での歓待では、信長自らがフロイスに膳を手渡し、恐れ入ったフロイスがそれを日本流に押しいただいて受け取ろうとすると、「汁がこぼれるからまっすぐ持つように」と優しい言葉をかけているのです。それは信長の恐ろしさを知る日本人にとって驚きに満ちた行為でした。フロイスは、信長に対する部下たちの畏れの凄まじさをも目撃証言しています。「信長が手でちょっと合図するだけで」部下たちは、「凶暴な獅子の前から逃れるように」

忽ち部屋から消え、信長が部屋内から一人を呼ぶと、すぐさま外から「百名もの」大きな返事が返ってきたとのことです。信長の宣教師達への厚遇ぶりは、配下の武将に伝わり、キリシタンシンパが織田政権に一拳に広がります。

信長は伴天連の布教を許し、公方の義昭に強いて、幕府から布教の允許状を公布させます。仏教勢力は伴天連追放の天皇の令旨を得て反撃しますが、信長は令旨を無視し、都に三層の立派な南蛮寺の建設を許します。さらに、天下布武の本拠とする安土城の建設を始めると、城下の一等地を教会建設用地として提供し、安土城天守の瓦と同じ特別な瓦の使用を許可するなど、全面的な支援を与えます。

フロイスの後継者となったオルガンティノは、そこに三階建ての異国風でありながら、内装は障子・畳という日本風の建築物で、1階には茶室まで備える日本一の大聖堂を建築しました。安土には日本人のための神学校も設けられ、各地から信徒が訪れるキリシタンの聖地となり、いずれは豊後に代わって日本布教の中心地となるほどの盛況を誇りました。

公方以上の最高権力者に擁護されるキリシタンにとっての至福の時、信長の真の恐ろしさを宣教師たちが味わう事件が起こります。(続く)

※参考文献 『回想の織田信長～フロイス「日本史」より～』松田毅一／川崎桃太 編訳 中公新書
『フロイス日本史－五畿内編Ⅲ－』松田毅一／川崎桃太 編訳 中公新書

2021年2月号(285号)

『南蛮資料から見る堺と天下人』～イエズス会宣教師の活躍・信長時代2～

信長は、天下取りの過程で、3回致命的な謀反に遭っています。3度目が彼の最後となった明智光秀の本能寺攻めで、最初の大きな謀反は1570年朝倉攻めの際に、背後の押さえとして信頼していた妹婿の浅井長政に裏切られ、信長は命からがら脱出できました。

2回目が1578年の荒木村重による謀反で、キリシタンを存亡の危機に陥れた事件です。本願寺を攻め倦み、毛利の水軍にも惨敗する厳しい情勢下、毛利の押さえとして摂津国を任せていた荒木村重が毛利に与すれば、水路だけでなく陸路からも毛利勢に道が開け放たれることとなります。村重の謀反も信長にとっては青天の霹靂であった模様で、秀吉や光秀を何度も使者として送り、村重に翻意を促します。村重が



無理でも、その配下で高槻城を守る高山氏さえ思いとどまらせれば何とかなると見た信長は、キリシタンを切り札とします。高山父子は飛騨守ダリオ、右近ジュストという洗礼名を持つ筋金入りのキリシタン大名で、配下の武将にもキリシタンが数多くいました。信長はオルガンティノを呼んで、まずは泣き落としで高山氏の説得を依頼しました。その模様は「目に涙を溜めるように話し始め、・・・ほとんど常に泣いているように話したので」オルガンティノは、感動するとともに、もし失敗すれば・・・との不安も感じましたが、それは的中します。高山右近は司祭の指示に従おうとしますが、父飛騨守は荒木への忠を守ろうとして交渉が難航しました。すると信長は、今度は「鞭」を使い、高山が裏切らねばキリシタンを滅ぼすという脅しでロレンソなど数人の伴天連を拘束します。オルガンティノは必死の思いで高槻城に潜入、確信犯のダリオには信長から逃げて来たと言ひ、右近とその部下の信徒を説得するという波乱万丈の活躍で何とか高槻城を開城させ、畿内キリシタンの滅亡を回避できたのです。

3 回目があの有名な本能寺の変です。守護神のように思っていた信長が、好意的な顔を見せ伴天連の説く世界観を良く理解するがデウスに跪くことはしないあの京都や堺の「倣岸不遜で神の恩寵に倣しない」日本人の一人であることをオルガンティノは思い知らされました。しかしそれだけではすみませんでした。信長が神仏を信ぜず、内裏（天皇）や公方という世俗の権威を無視する独裁者であることはオルガンティノも分かっていましたが、信長は本願寺を下し毛利もあと一歩で滅ぼせる目途がつくと、遂に「途方もない狂気と盲目に陥り、自らに優る宇宙の主なり造物主は存在しない」と豪語するようになります。

天下の主たる信長は安土城に「摠見寺」という寺院を建立し、諸国の民の礼拝の対象とします。信長は「予自らが神体である」と言ひ、摠見寺の一番上に「盆山(Bosn)」という石を置いたとのことですが、現在安土城址の信長公本廟の上にある石がそれでしょうか。信長は、「その年(1582 年 5 月)の彼が生まれた日」を聖日として、諸国の民に参拝することを布告すると「諸国、遠方から同所に集合した人々は甚大で、到底信じられぬばかりであった」ということです。

しかし信長の歓喜をデウスは「19 日以上続ける」ことを許しませんでした。19 日後の 1582 年 6 月 2 日の早朝、本能寺のすぐ近くにあった南蛮寺で、司祭のカリオンがミサの支度を始めていると、数名の信徒が駆けつけ、騒ぎが起きているのでしばらく待つほうが良いと知らせに来ました。「間もなく銃声が響き、火が我らの修道院から望まれた」そう、あの本能寺の変をも宣教師たちは身近に体験していたのです。彼らは信長そう、あの本能寺の変をも宣教師たちは身近に体験していたのです。彼らは信長の最後をこう記録し最後をこう記録しています。「ちょうど手と顔を洗い終え、手拭で身体を拭いている信長を見つけたので、ただちにその背中に矢を放ったところ、信長はその矢を引き抜き、鎌のような形をした長槍である長刀という武器を手にして出てきた。そしてしばらく戦ったが、腕に銃弾を受けると、自らの部屋に入り、戸を閉手にして出てきた。

そしてしばらく戦ったが、腕に銃弾を受けると、自らの部屋に入り戸を閉じ、そこで切腹したと言われ、また他の者は、また他の者は、彼は直ちに御殿に放火し、生きながら焼死したと言った」信長は天下統一を目前に、デウスを超えようとして、高転びに転んでしまったのです。

(信長時代終わり、秀吉時代に続く)

参考文献

『回想の織田信長～フロイス「日本史」より～』 松田毅一 川崎桃太 編訳 中公新書

『フロイス日本史一五畿内編Ⅲ一』 松田毅 川崎桃太 編訳 中公新書

『南蛮資料から見る堺と天下人』～イエズス会宣教師の活躍・秀吉時代！～

本能寺の変という突発的な事件により、図らずも下賤の身から天下人になった秀吉は、絶対的権力者であった信長の後継者としての自己の正当性を天下に認めさせる必要がありました。フロイスは秀吉を次のように表しています。

「為し得ること万事において信長を凌ぎ、彼よりも秀でた人物になろうとした」

安土城に勝る規模の大坂城を建城し、その城下を信長が愛した堺の街を凌ぐ交易都市として発展させ、位は右大臣信長を超え、関白太政大臣にまで昇りつめます。

伴天連にとって幸運なことに、キリスト教に対する庇護をも秀吉は継承し、安土城下にあった教会を大坂に再建させるため「川に沿った高台で眺望の良い」極上地を提供し、オルガンティノは高山右近の支援を得て、河内にあった教会を移築することにより、迅速に大坂城下に立派な教会を築き秀吉を喜ばせます。秀吉は信長と異なり「ひとたらし」と云われた人を惹きつける陽気な魅力を持ち、信長の冷酷さを垣間見た陽気なイタリアンのオルガンティノを安心させ、畿内の布教活動を右近と共に進めます。

イエズス会のトップダウン戦略は変わらず、秀吉配下の有力武将が相次いでキリシタンに改宗していきます。既に信徒であった父立佐や兄如清を持つ小西行長（アゴスティノ）は勿論、武将の器の大きさを信長にも認められていた蒲生氏郷（レオン）、秀吉の片腕で秀吉自身も警戒するほどの謀将黒田官兵衛（シメオン）までがオルガンティノにより受洗し、その一族領民が次々と信徒となります。アンチキリストの代表者であった松永久秀の甥の内藤如安は、洗礼名ジョアンをそのまま名前とし、後に高山右近と共に最後まで棄教を拒みマニラに追放され、かの地で土となった敬虔な信徒でした。秀吉が大坂城を拠点として着々と天下人としての地保を固めていくにつれ、畿内のキリスト教勢力も確固たるものとなっていきます。



豊臣秀吉

一方、イエズス会本部のある九州では、大友氏、大村氏、有馬氏という旧来のキリシタン大名が、龍造寺氏や島津氏に攻め込まれ、存亡の危機を迎えていました。日本の布教長であったコエリョは、1586 年 5 月大坂城内の秀吉に初めて謁見、秀吉は上機嫌で城内を自ら案内、布教を認める朱印状をその場で授かるほどの大歓待を受けます。コエリョはその時の秀吉の機嫌に乗っかり、九州のキリシタン大名たちを救うため島津征伐を秀吉に依頼し、その為にポルトガルの大型船 2 隻を提供するとまで言いました。聖職者としては出すぎた提案に、同席したオルガンティノや右近は眉を顰めます。



高山右近

ポルトガルやスペインがインドや東南アジアで、キリスト教布教と侵略を同時に進めているという情報は、以前から日本にも伝わっていました。秀吉は、「かつて信長様に、伴天連どもは宗教的熱意から日本に来たのではなく、統治欲・征服欲から来たのではないかという危惧を伝えたところ、信長様は一笑に付し、あのように遠いところから、そのような企てを遂行するに足りるだけの兵力を日本に派遣することは不可能だと答えられた」ということを、伴天連に述懐したという記録がイエズス会のローマへの書状に残っています。

同じ時、当事者の大友宗麟も大坂城を訪れ、秀吉に島津征伐を依頼し、コエリョと共に黄金の茶室で茶を頂いています。この大坂城での宗麟の見聞記録の



小西行長

中に、秀長から聞いたという「内々之儀は宗易、公儀之事は宰相（秀長）存じ候」という千利休の陰の実力者ぶりを伝える歴史的証言が記録されていました。秀吉の心の中に潜んでいたキリシタンに対する危惧の念が顕在化するの、この翌年 1587 年 7 月から始まる九州征伐でのことでした。（続く）

参考文献

『豊臣秀吉と南蛮人』 松田毅一 著 朝文社

『フロイス日本史Ⅰー豊臣秀吉編Ⅰー』 松田 毅一／川崎 桃太 編訳 中央公論社

2021 年 5 月号(288 号)

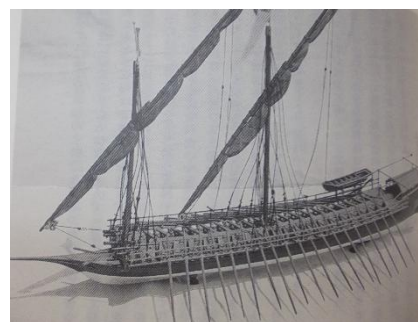
『南蛮資料から見る堺と天下人』～イエズス会宣教師の活躍・秀吉時代 2～

秀吉にとっては予定の行動ではありましたが、大友氏等キリシタン大名にとっては、九死に一生を得た九州征伐は、1587 年 4 月に始まり、島津氏の必死の抵抗に秀吉軍は大苦戦しますが、6 月には大勢不利と見た島津義久が早期降伏し、たった 2 か月で終わりました。

秀吉はイエズス会の布教本部である九州滞在中に、伴天連の脅威を実感します。大友氏などキリシタン大名に伴天連が大砲などの軍事援助をしていること、伴天連の領地となった長崎は要塞化され軍船まで備え、そこではキリスト教の教会法による統治が行われていること、キリシタン大名領内では寺社仏閣が破壊され仏教徒が迫害されていること等々。それは畿内のオルガンティノに代表される融和的な布教状況とは異なり、かつて秀吉が聞いていた「キリスト教は侵略の手先」という情報を裏付けるものでした。秀吉は 7 月 15 日に博多湾に停泊していた伴天連の軍船（フスタ船）をいきなり訪れ、布教長コエリョが自慢げに案内する船内を上機嫌で隈なく視察し満足して去ります。それを聞いた高山右近が 22 日にコエリョに「間もなく、キリシタン宗門に対して大いなる妨害が始まるように思えてならぬ」と危惧を表しますが、コエリョは秀吉の表面的な愛想に惑わされたのか、日本人を侮る尊大さの故か、これを無視しますが、その報いは直ぐに現れました。7 月 23 日、秀吉は「伴天連追放令」を突如発布しキリスト教布教の禁止を命じます。

秀吉はキリシタン大名領内のデウスへの絶対的服従とパライズ(天国)での至福を願う信徒集団に、信長ですら大苦戦した一向宗徒の姿を重ねたのでしょう。浄土での往生のみを願う門徒集団が、雑賀衆の鉄砲で強化された時の脅威に比して殉教を厭わぬ信徒集団が、大砲で武装され有力なキリシタン大名に指揮されれば、遥かに恐ろしいものとなります。キリシタン大名は九州だけでなく、秀吉子飼いの有力武将にまで広がっており、彼らが伴天連の指示で結束して秀吉に対抗すれば天下取りは危うくなります。秀吉の禁教令の目的はポルトガルの植民地化した長崎等の解放と、キリシタン大名達を棄教させることでした。長崎を取り戻し、独り棄教を拒んだ高山右近だけは改易させると、その他の大名は安堵し、伴天連の国外退去に関しては徹底せず、南蛮貿易での伴天連の力が大きいことから黙認します。スペイン国王に援助を求め秀吉と軍事的対決を図ったコエリョが病死すると、オルガンティノ達は右近とともに潜伏します。代わって秀吉との窓口となったのは、司祭でもなく会計総務担当官に過ぎなかったジョアン・ロドリゲスという若者でした。彼はポルトガル語の読み書きもできない少年期に来日し、日本で神学や日本語を学び、日本人とその文化に精通していました。

「数寄(suky)と呼ばれるこの新しい茶の湯(cyanoyu)の様式は、有名で富裕な堺(Sacay)の都市にはじまった」



フスタ船

という『日本教会史』で茶の湯を紹介した彼の記述は、茶道という日本固有の文化に対する並々ならぬ理解を示しています。秀吉は日本人のように話せるロドリゲスを寵愛し、南蛮交易の斡旋役として重用しました。

秀吉は、信長超えの最後の仕上げともいうべき、無謀な明国制覇に着手しますが、さしもの英傑にも老齢化による衰えが迫ります。秀吉は生来陽気で、人に好かれる性格を武器にもしていましたが、絶対的独裁者となった老人は、感情的で衝動的言動に歯止めがかからなくなります。誰もが逆らうこともできず、秀吉の機嫌を伺うことしかできない状況では、利休のように自らの死をもって対抗するか、高齡の秀吉の死をひたすら待つという消極的な解決策しかありませんでした。

イエズス会も秀吉が存命中は、潜伏し信徒を温存しながらその時を待ちました。病状秘匿の為に嚴重に封鎖された伏見城の大奥に、ロドリゲスだけは入ることを許され、秀吉が枕元に呼び寄せ「予は貴師に接して少なからず心が和む。余命幾ばくもなく、再びまみえることはあるまい」と臨終の言葉を語ったということが、ローマの総長宛て書簡にあります。それは秀吉の死後半月も経たない10月3日付けでした。嚴重に秘匿された秀吉の死も、彼らは的確に把握していたのです。(続く)

参考文献

『豊臣秀吉と南蛮人』松田 毅一 朝文社

『通辞ロドリゲス—南蛮の冒険者と大航海時代の日本・中国』マイケルクーパー 松本たま訳 原書房

2021年7月号(290号)

『南蛮資料から見る堺と天下人』～イエズス会宣教師の活躍・家康時代～

イエズス会にとって、待ち望んだ秀吉の死後その後継者が誰になるかが問題でした。

豊臣政権が存続するのは当然として、幼い秀頼の後見として誰が実権を握るのか？小西行長等キリシタン大名と親しくキリシタンシンパでもあった石田三成がイエズス会にとって望ましい後継者でしたが、わずか2年後の1600年には関ヶ原の戦いで二人とも殺され、徳川家康が実権を握ります。イエズス会がしたたかなのは、秀吉の死後直ぐに朝鮮戦役からの撤退が進む名護屋で石田三成へ接触したのは勿論、一方では京都にいた徳川家康にもしっかりコンタクトをしていることです。公式には秀吉の禁教令がまだ解けていない状況で、オルガンティノのような司祭は動けず、修道士という身分ではありませんでしたが日本語堪能な渉外担当者のロドリゲスとその主役となりました。

最初の謁見では家康はキリスト教に対する態度を明確にはしませんでした。関ヶ原の戦いに勝利した直後の上機嫌の家康に再度面会した時には、イエズス会の会所の存続を許され、翌年には、生糸交易を独占するためにロドリゲスを家康の交易代理人とします。ロドリゲスは、フロイスのように感情表現まで含めた詳細な記述を残してないので家康の本心は伺い知れませんが、実は同じ頃、家康はもう一つの外国人とのチャンネルを得ていました。

その頃、カトリック系のスペイン・ポルトガルという大航海時代の主役は、イギリス・オランダという新興プロテスタント国家の台頭に脅かされるようになっていました。ローマ教皇を戴くカトリック王国は、アジアへの進出を当然のこと教・商一体で進めましたが、蘭・英のアジアへの進出は、ともに東インド会社という史上初めての株式会社が主体で、それは営利事業をその存在目的とする組織です。オランダ東インド会社は東アジアへの本格的な進出の為、太平洋回りの航路開拓の為に5隻の艦隊を派遣しますが、途中スペイン・ポルトガル船の攻撃、嵐などで艦隊は四散し、出航2年後の1600

年によやく 1 艘だけが沈没寸前で日本の豊後に漂着しました。(利島の杜に陳列されているあのリーフデ号がその船です) 当時大老筆頭であった家康は、リーフデ号を我が物にし、半年後にはその大砲を関ヶ原の戦いで使ったと云われるほど、この新たな外国船とその乗員を利用します。

信長、秀吉はカトリック王国の「南蛮人」と接触し、新たな知識と交易の利益の為彼らを重用しましたが、一神教という宗教の危険性から禁教し、それでも排除はできず、その存在を黙認せざるを得ませんでした。しかし家康は布教とは無縁の交易のみを求める「紅毛人」という外国人の存在を知ったのです。家康は、ロドリゲスの利用価値は知っており重用しますが、一方でリーフデ号の乗員も帰国を許さず保護し、ヨーロッパの政治情勢や、新たな技術・知識の吸収を行いました。



ロドリゲスは、長崎で生糸交易責任者としてポルトガル商人と日本商人、そして長崎奉行との利害調整の板挟みで苦勞し、彼らの数々の誣告(ぶこく)により家康から疑惑を受けるようになります。(その時の長崎奉行が後に初代堺奉行となった長谷川藤広です) 1609 年、例年通りマカオから来たポルトガル船長を伴い駿府に赴いたロドリゲスは、暫く家康に謁見できませんでした。実は長崎に後から着いたオランダ船の代表が家康に謁見するまで待たされていたのです。この 4 年前、家康はリーフデ号船長に帰国を許した時に東インド会社総督に親書を持たせており、このオランダ船代表はその返書を携えて来た使節だったのです。家康はオランダに通商を許す朱印状を与え、平戸にオランダの商館を持つことも許し、イエズス会の日本との交易独占は破れました。翌年には少年時代から 33 年間日本で成人し、禁教時代のイエズス会を背負って来た 49 歳のロドリゲスはマカオ追放となりました。

フロイスもオルガンティノも長崎に骨を埋め、日本宣教の最高位にあったヴァリニャーノもマカオに去り、イエズス会の日本宣教の歴史も終焉に向かいます。日本の風土を熟知し柔軟な布教戦略で対応してきたイエズス会に批判的なフランシスコ会、ドミニコ会という原理主義的修道士会は、禁教下においても殉教を辞さず積極的な布教を続け、新たな幕府体制を固めたい家康は、徹底的な禁教に踏み切ります。1614 年本格的な伴天連追放令により、潜伏していたイエズス会宣教師 88 名がマカオとマニラに向け追放され、高山右近もマニラに去ります。

ザビエルのキリスト教伝来から 65 年間にも渡る日本でのイエズス会の宣教の歴史は幕を閉じ、以後日本はキリスト教を徹底弾圧し、明治時代になってもそれは続き、欧米諸国の圧力によりキリスト教が解禁になったのは、260 年後の明治 6 年 2 月のことになります。

参考文献：

『通辞ロドリゲス—南蛮の冒険者と大航海時代の日本・中国』

マイケルクーパー／松本たま訳 原書房